



Title	複文における「の(だ)」の機能 : 「のではなく(て)」 「のでは」と「のだから」 「のだが」
Author(s)	野田, 春美
Citation	阪大日本語研究. 1992, 4, p. 73-90
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/8533">https://doi.org/10.18910/8533</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 複文における「の(だ)」の機能

——「のではなく(て)」「のでは」と「のだから」「ののだが」——

## On the Function of *NO(DA)* in Complex Sentences

野 田 春 美

NODA Harumi

キーワード：複文，接続助詞，スコープの「の(だ)」，ムードの「のだ」，名詞句化

### 1. は じ め に

#### 1-1 研 究 の 目 的

文末に頻繁に現れる形式の一つに「の(だ)」(以下、「んだ」「のです」「んです」「のである」「の」などの代表形とする)がある。その機能については、さまざまな研究が進められてきたが、まだ多くの問題点が残っている。そして、「の(だ)」は文末に現れるばかりでなく、従属節などの節末において接続助詞に前接することがあるが、そういった場合の「の(だ)」の機能についての考察は、さらに不十分であるように思われる。「のだから」や「ののだが」などについての個別の考察は多少行われているが、それらどうしの関係、位置づけ、といったことに関しても、考察を進めていくことが必要であろう。

そこで、本稿では、接続助詞に前接する「の(だ)」の機能を、文末の「の(だ)」の機能とも関連づけながら整理していきたい。

#### 1-2 考 察 の 範 囲

まず、主な接続助詞に「の(だ)」が前接した形式にはどのようなものがあるかを見ておく。

「の(だ)」+「が」→「ののだが」

「の(だ)」+「から」→「のだから」

「の(だ)」+「たら」→「のだったら」

「の(だ)」+「ば」→「のであれば」

「の(だ)」+「なら」→「のなら」

「の(だ)」+「と」→「のだと」

「の(だ)」+「ては」→「のでは」

「の(だ)」+「ても」→「\*<sup>1)</sup>のでも」

このうち、「の(だ)」に後接しない「ても」、代表的な条件の接続助詞に「の(だ)」が前接している「のだったら」「のであれば」「のなら」「のだと」については、今回は除外する。したがって、上にあげたもののうち今回の考察の対象とするのは、「ののだが」「のだから」「のでは」である。また、これ以外に、「のではなく(て)」という形式は、「の(だ)」+「接続助詞」という形にはなっていないが、「の(だ)」と否定のテ形接続の合体した形と考えられるため、考察の対象に加える。

以下、2. で文末の「の(だ)」の機能を見た後、3. で「のではなく(て)」, 4. で「のでは」, 5. で「のだから」, 6. で「ののだが」について各々考察し、7. で全体を整理する。

## 2. 文末の「の(だ)」の機能<sup>2)</sup>

### 2-1 ムードの「のだ」

まず、文末の「のだ」の典型的な用法を一つ見ておく。

(1) 「咲かないよ、旅行に行ったんだ。」 (『N・P』p. 214)

(1)では、「咲かない」と「(咲が)旅行に行った」とことと何らかの関係(この場合は因果関係)があることが「のだ」によって示されている。このような「のだ」は「関係づけ」とでも言うべきムードを持つ助動詞である。

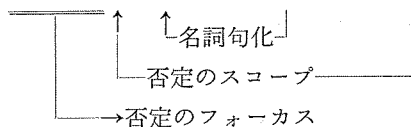
### 2-2 スコープの「の(だ)」

次に、「の(だ)」のもう一つの用法を見ておく。

(2) 悲しくて泣いてるんじゃない。

(3) \*悲しくて泣いていない。

(2') [悲しくて泣いている] の ではない。



(2)のような文で「悲しくて」という部分を否定のフォーカスにするためには、「の(だ)」は必須である。(4)も同様である。

(4) 健は、令子と会ったのではない。圭子と会ったのだ。

このような「の(だ)」「の(ではない)」は、その前の部分を名詞句化することによって、「悲しくて」「令子と」「圭子と」いった部分を否定や肯定のフォーカスにするという構文的機能を担っている。これを、本稿ではスコープの「の(だ)」と呼び、ムードの「のだ」とは区別する。スコープの「の(だ)」において名詞句化の機能を果たしているのは、正確には「の」の部分なので、本稿では「だ」を( )に入れて、「の(だ)」と記す。スコープの「の(だ)」とムードの「のだ」の両方をまとめて指すときも、便宜上、「の(だ)」と記す。

さて、次節から各形式の考察に入るが、結論を先に述べておくと、「のではなく(て)」「の(ではない)」の「の(だ)」は、スコープの「の(だ)」であり、「のだから」「のだが」の「の(だ)」は、ムードの「のだ」である。以下、順を追って考察していく。

### 3. 「のではなく(て)」<sup>3)</sup>

#### 3-1 「ないで」「なくて」と「のではなく(て)」

「の(だ)」を用いない否定のテ形接続形式といえ、ば、「ないで」と「なくて」である。これらは、前件(以下、Pと記す)と後件(以下、Qと記す)の主語が同一の場合、PがQを限定、修飾するという関係になる。

(5) 純はカバンを持たないで学校に行った。(付帯状況)

(6) 漢字を覚えられなくて困っています。(原因)

これらは、「のではなく(て)」で表すことはできない。

(7) \* 純はカバンを持つのではなく(て), 学校に行った。

(8) \* 漢字を覚えられるのではなく(て), 困っています。

また、「ないで」「なくて」は、PとQの主語が異なる場合、主に、PとQとの並立を示す。

(9) 令子は来ないで, 圭子が来た。

(10) 令子は来なくて, 圭子が来た。

次のように「のではなく(て)」を用いた文も自然である。

(11) 令子が来たのではなく(て), 圭子が来たのだ。

このような場合の「ないで」「なくて」の文と「のではなく(て)」の文との違いについて、次の節で「[名詞]+ではなく(て)」の文の性質を参考にしながら述べる。

### 3-2 「[名詞]+ではなく(て)」と「のではなく(て)」

Pの述語が名詞の場合、否定のテ形接続形式は、「ではなく(て)」である。

(12) 山田さんは学生ではなく(て), フリーターだ。

この「ではなく」について、ティノコ(1988)は、「否定した内容( $S_1$ )は、 $S_2$ の内容を除外しなければならないという論理で働く。つまり、 $S_1$ の内容と $S_2$ の内容は話し手の観点から言えば同時に成り立たない」(p. 19)としている。

確かに、(12)では、「学生であること」と「フリーターであること」は相互除外的である。一方、次の(13)では、PとQは相互除外的ではなく、「ではなく(て)」を用いると不自然である。

(13) \* 山田さんは学生ではなく(て), 金持ちだ。

そして、「のではなく(て)」にも、同じ性質が見られる。

(14) 彼女は大阪で生まれたのではなく(て), 京都で生まれたのだ。

(15) \* 花子は気が弱いのではなく(て), 体力があるのだ。

(14)はPとQが相互除外的であり、自然な文である。(15)は相互除外的ではなく、不自然な文になってしまう。

(16) 令子が来たのではなく(て), 圭子が来たのだ。(=(11))

(16)では、PとQは、本来、相互除外的な事柄ではないが、どちらか一人しか来なかった、という相互除外的な捉え方をするときに関り、「のではなく(て)」が自然である。相互除外的に捉えていない場合には、「なくて」等が用いられる。

(17) 令子は来なくて, 圭子が来た。(=(10))

これが、前節で問題となった「ないで」「なくて」と「のではなく(て)」との違いである。

ここで、「のではなく(て)」と「[名詞]+ではなく(て)」に共通した性質が見られるということは、「のではなく(て)」の「の(だ)」が、その前の部分を名詞句化するという目的で用いられていること、つまり、スコープの「の(だ)」であることを示すものである。

さらに、もう一点、「[名詞]+ではなく(て)」と「のではなく(て)」の共通点を見ておく。否定のフォーカスに関する問題である。まず、「[名詞]+ではなく(て)」の文における否定のフォーカスを見てみる。

(18) 山田さんは学生ではなく(て)フリーターだ。

(19) 山田さんは文学部を卒業した人ではなく(て), 法学部を卒業した人だ。

(20) 山田さんは去年卒業した人ではなく(て), 去年入学した人だ。

(18)~(20)では、「ではなく(て)」の前の波下線部が否定のフォーカスである。つまり、[連体修飾部+名詞]の中の一部がフォーカスとなる場合が少なくない。そして、「のではなく(て)」の文においても同様の現象が見られる。

(21) 山田さんは文学部を卒業したのではなく(て), 法学部を卒業したのだ。

(22) 山田さんは去年卒業したのではなく(て), 去年入学したのだ。

(21)(22)のように、「のではなく(て)」文も、「の」によって名詞句化された中的一部分がフォーカスとなることが多い。

### 3-3 「のではなく(て)」の「の(だ)」

以上の考察から、「のではなく(て)」における「の(だ)」の機能をまとめてみる。

◆「のではなく(て)」の次の特徴は、「[名詞]+ではなく(て)」と共通している。

◇「Pのではなく(て)Q」において、PとQは相互除外的である。

◇名詞句化したPの一部が否定のフォーカスとなることが多い。

◆したがって、「のではなく(て)」の「の(だ)」は、文の一部を名詞句化するために用いられるスコープの「の(だ)」である。

#### 4. 「の で は」

##### 4-1 「ては」と「のでは」

まず、「ては」の機能について簡単に見ておきたい。ここで扱うのは、(23)のような反復を表す「ては」ではなく、(24)のような「ては」である。

(23) 書いては消し、考えては齧り、私は最後のひとことにこだわっていました。  
(『巨食症の明けない夜明け』p. 147)

(24) 「しかしそういうことをいっていては、患者さんは治せません」  
(『脳は語らず』p. 178)

(24)のような「ては」は、「条件を提示し、そこからの順当な展開で成り立つと思われる事柄を示す」(仁田(1982) p. 401)ものであるが、その前件Pは、実現が確定していない仮定的な場合もあれば、すでに実現している事実的な場合もある。(25)はPが仮定的な例、(26)は事実的な例である。

(25) 君が欠席しては、みんながっかりするよ。

(26) こう寒くては、何もできない。

また、Qの性質については、松下(1930)等の指摘がある。

(27) あんなに怠けてはきっと落第する。

(28) \*あんなに勉強してはきっと優等生になる。

松下は上のような例をあげ、「ては」は、「必ず束縛を感じる場合困る場合にのみ用ゐる」(p. 273)ものであり、「都合の善い場合には決して用ゐない」(p. 273-274)としている。

以上の性質に加えて、蓮沼 (1987) は、「ては」は「P デナイ ヨウニスベキデアル (P デアル / スベキデハナイ)」といった話し手の当為的判断を隠れた結論として含意するような文脈において用いられる、と指摘している。

(29) そんな暗いところで本を読んでは目を悪くしますよ。

例えば、(29)では、「暗いところで本を読まないようにすべきである (読むべきではない)」といった話し手の当為的判断が隠れている、ということである。

以上から、「ては」の性質として、ここでは、次の3点を押さえておきたい。

〔性質1〕 Pは仮定的な場合もあれば、事実的な場合もある。

〔性質2〕 Qは否定的な内容である。

〔性質3〕 「P デナイ ヨウニスベキデアル (P デアル / スベキデハナイ)」  
といった話し手の当為的判断を隠れた結論として含意する。

では、「のでは」も同様の性質をもっているかどうかを見ていく。まず、

〔性質1〕について考察する。

(30) 君が欠席しては、みんながっかりするよ。(=(25))

(31) 君が欠席するんじゃ、寂しいなあ。

(30)では「君が欠席する」ということが仮定的であるのに対し、(31)では、未実現ではあるが、実現が既に確定したこととして扱われており、仮定的とは言えない。一方、Pが事実的な場合は「ては」と「のでは」の差は少なくなるようである。

(32) こう寒くちゃ、何もできない。

(33) こう寒いんじゃ、何もできない。

以上のように、「のでは」の文においては、Pは事実的であるか、実現が確定的な事柄である。

次に、〔性質2〕〔性質3〕について考察する。

(34) あんなに怠けてるんじゃ、きっと落第する。

(35)? あんなに勉強してるんじゃ、きっと優等生になる。



(34)(35)を見ると、やはりQが否定的な内容である(34)の方が自然なようである。しかし、「ては」を用いた(36)と比べると、Qが否定的でない(35)の文も許容度が高い。

(36) \* あんなに勉強してはきっと優等生になる。(=(28))

もう少し例を見てみよう。

(37) 5歳の頃から日本にいるんじゃ、日本語がうまいのは当然だ。

(38) \* 5歳の頃から日本にいちゃ、日本語がうまいのは当然だ。

「日本語がうまいのは当然だ」ということは、否定的な内容ではない。また、「5歳の頃から日本にいるべきではない」といった当為的判断は含意されていない。しかし、「のでは」の文(37)は自然である。

したがって、「のでは」を用いた文では、Qが否定的とは限らず、また、「Pデナイヨウニスベキデアル (Pデアル/スベキデハナイ)」といった当為的判断を必ずしも含意しないということがわかる。

#### 4-2 「のでは」と「[名詞]+では」

次に、「[名詞]+では」が用いられる文について考察を加えたい。

まず、「ては」の〔性質1〕とした、Pが事実的か仮定的か、を考察する。

(39) 雨んじゃ、中止するしかない。

(40) \* もし雨いじゃ、中止にしよう。

(39)は、「雨」であることが既に実現している場合、実現が確定的な場合に自然に用いられる文であり、仮定的な場合に「[名詞]+では」を用いた(40)の文は不自然である。

次に、〔性質2〕と〔性質3〕について、考察する。

(41) 週休三日んじゃ、新入社員が集まるのも当然だ。

(41)では、Qは否定的な内容とは言えない。また、「週休三日でないようにすべきである」といった当為的判断が必ず含意されているとは考えにくい。

つまり、「ては」の持つ三つの性質を「[名詞]+では」はもっておらず、その点において、「のでは」と共通している、ということになる。

そこで、「[名詞]+では」を用いた(41)の文と、「のでは」を用いた(42)の文とを比べてみる。

(42) 休みが週三日あるんじゃ、新入社員が集まるのも当然だ。

(41)と(42)では、ほぼ同じ内容を表していると考えてよいだろう。一方、「ては」を用いた(43)では、「休みが三日あるべきではない」という当為的判断が含意されてしまい、不自然な文となる。

(43)??休みが週三日あっちゃ、新入社員が集まるのも当然だ。

#### 4-3 「のでは」の「の(だ)」

以上の考察から、「のでは」における「の(だ)」の機能をまとめてみる。

◆「のでは」の次のような特徴は、「[名詞]+では」と共通している。

◇Pは仮定的ではなく、事實的、確定的な条件である。

◇Qは否定的な内容とは限らず、また、「Pデナイヨウニスベキデアル(Pデアル/スベキデハナイ)」といった当為的判断を必ずしも含意しない。

◆したがって、「のでは」の「の(だ)」は、文の一部を名詞句化するために用いられるスコープの「の(だ)」である。

### 5. 「のだから」

#### 5-1 「から」と「のだから」

「から」は、原因・理由を表す接続助詞の代表的なものである。そして、「のだから」が「から」とは違う性質を持つことは、駒田(1987)、田野村(1990)などで指摘されてきた。

まず、Qが単なる事実の述べたての場合は、「から」は用いられるが、「のだから」は用いられない。

(44) 雨が降ったから、休みました。

(45) \*雨が降ったんだから、休みました。

「のだから」の文でQとして提出されるのは、(46)(47)のような話し手の判断、(48)のような命令、依頼などである。

(46) 「そうですね、できないですね。お医者さんには、それく

らいのことでできると思ったけどね」

小倉米店のおかみさんが図々しく押して来たので、貞春は冷酷に言い返した。

「私にできないんだから、他の医者にもできないと思うよ」

(『神の汚れた手(下)』p. 34)

(47) リカ「たまにはハメ外して、三上くんにはヤキモチ妬かせるぐらいしなきゃ？」

さとみ「うん——」

リカ「あーゆー人好きになっちゃったんだからさ、それなりに強く出なきゃ」

(『TV版シナリオ集』東京ラブストーリー』p. 143-144)

(48) 頭が痛いんだから、静かにして下さい。

また、「のだから」には、Pに関しても制限がある。「のだから」を用いた(48)と「から」を用いた(49)を比べてみよう。

(49) 頭が痛いから、静かにして下さい。

(48)の場合、話し手は、P「(話し手が)頭が痛い」を相手が既に知っている事柄として、あるいは、相手が知っているかのようにみなして提出しているようである。一方、(49)では、話し手はPを相手がまだ知らない事柄として提出している。「のだから」を用いた(46)(47)では、(48)と同様に、話し手は、Pを相手が既に知っている事柄とみなして提出している。

そして、(46)(48)の例を見るとわかるように、「のだから」の文は、しばしば、非難がましいニュアンスを帯びる。

それぞれの性質どうしの関係については別稿に譲り、以上の考察から、ここでは、「のだから」の性質として、次の3点を押さえておきたい。

〔性質1〕 Qは、事実の述べたてではなく、話し手の判断や、命令、依頼などである。

〔性質2〕 Pは、話し手が、相手が知っているとみなした事柄であることが多い。

〔性質3〕 文は、しばしば非難がましいニュアンスを帯びる。

## 5-2 「[名詞]+だから」と「のだから」

では、「[名詞]+だから」の文について考察を加えたい。

まず、「のだから」の〔性質1〕とした、Qの制限はどうだろうか。

(50) 雨だから、洗濯物が濡れている。

(51) 雨だから、中止にしたほうがいいと思うよ。

(52) 雨だから、休みなさい。

「[名詞]+だから」は、(50)のように主文末が事実の描写であっても用いることができ、「のだから」の持つQの制限はない。

次に「のだから」の〔性質2〕とした、Pの制限について考察する。

(53) (AもBも窓の外を見ているときに)

A 「雨だから中止にしたほうがいいと思うよ」

B 「そうだね。中止にしようか」

(54) (Aだけが、雨であることを知っているときに)

A 「雨だから中止にしたほうがいいと思うよ」

B 「えっ、雨なの？困ったなあ」

(53)(54)のように、相手がPを知っていても知らなくても、「[名詞]+だから」は用いることができる。

では、「のだから」の〔性質3〕とした、「非難がましいニュアンス」についてはどうだろうか。(50)～(54)のどの例を見ても非難がましさは生じていないようである。(55)のように「のだから」を用いると、非難がましさが生じる。

(55) 雨なんだから、休みなさい。

## 5-3 「のだから」の「の(だ)」

以上の考察から、「のだから」における「の(だ)」の機能をまとめてみる。

◆「のだから」の次のような特徴は、「[名詞]+だから」とは共通していない。

◇Qは事実の述べたてではなく、話し手の判断や、命令、依頼などである。

◇Pは、話し手が、相手が知っているとみなした事柄であることが多い。

◇文はしばしば非難がましいニュアンスを帯びる。

- ◆したがって、「のだから」の「の(だ)」は、文の一部を名詞句化するために用いられるスコープの「の(だ)」ではなく、ムードの「のだ」である。

## 6. 「の だ が」

### 6-1 「が」と「のだが」

「が」は、いわゆる逆接を表す接続助詞の代表的なものであるが、次のように用いられることもある。

(56) (俵万智と野田秀樹の対談で)

俵 野田さんは脚本を書いて、演出もして、そのうえ自分で舞台にも立たれていますが、それぞれの自分の顔ってあるんですか。

(『魔法の杖』p. 105)

(56)では、PとQは相反する内容ではない。発話の中心となるのはQの部分であり、Pはその前置きとなっているといえよう。ここでは、このような前置きの用法における「が」と「のだが」の違いを考えてみたい。

まず、(56)の例で、「のだが」を用いると、やや不自然である。

(57) ?野田さんは脚本を書いて、演出もして、そのうえ自分で舞台にも立たれているんですが、それぞれの自分の顔ってあるんですか。

次の例も同様に、「が」の方が自然である。

(58) 「北沢くんでしたね。きみとはゆっくり話す機会もありませんでしたが、直美に、いい思い出をもたせてやっていただきました。感謝しています。(後略)」  
(『いちご同盟』p. 238)

(59) 「北沢くんでしたね。??きみとはゆっくり話す機会もなかったんですが、直美に、いい思い出をもたせてやっていただきました。感謝しています。(後略)」

逆に、「のだが」が自然で、「が」が不自然になるのは、次のような例である。

(60) この原稿は四月十日に書いているのだが、きょうは面白いニュースと悲しいニュースがそれぞれ一つずつあった。

(『すべての男は消耗品である』p. 260)

(61)??この原稿は四月十日に書いているが、きょうは面白いニュースと悲しいニュースがそれぞれ一つずつあった。

(62) 「そこでちょっとお聞きしたいのですが、先生はあの手術の前に、相田義男を診察されていたのでしょうか」

(『脳は語らず』p. 165)

(63)??「そこでちょっとお聞きしたいですが、先生はあの手術の前に、相田義男を診察されていたのでしょうか」

(56)～(59)と(60)～(63)との違いは、相手がPを既に知っているか、という点にある。つまり、相手もPを知っている(56)～(59)では「が」が自然で「のだが」は不自然であるのに対し、相手がPを知らない(60)～(63)では、「のだが」が自然で「が」が不自然である。

つまり、前置きのために「のだが」を用いるのは、Pが、相手が知らない事柄とみなされる場合である。これは、「のだから」において、Pが相手が既に知っているものとして提出されることと全く逆の現象であり、興味深い問題だが、今回は現象を指摘するにとどめておく。

## 6-2 「[名詞]+だが」と「のだが」

では、「[名詞]+だが」の場合はどうだろうか。

(64) ここだけの話だが、斉藤さんは近々会社をやめるらしい。

(65) 君ももう四年生だが、将来はどうするつもりですか。

(64)ではPは相手が知らない事柄であり、(65)では相手も知っている事柄である。このように、「[名詞]+だが」には、「のだが」の持つようなPの制限はない。

## 6-3 「のだが」における「の(だ)」

以上の考察から、「のだが」における「の(だ)」の機能を考えてみる。

◆「のだが」による前置きの次のような特徴は、「[名詞]+だが」とは共通していない。

◇話し手は、Pを相手が知らない事柄として提出している。

◆したがって、「のだが」の「の(だ)」は、文の一部を名詞句化するために用いられるスコープの「の(だ)」ではなく、ムードの「のだ」である。

## 7. ま と め

ここまでの考察をふまえて、各形式における「の(だ)」の性質、機能の異同を整理したい。

まず、「の(だ)」が、文の一部を名詞句化するために用いられるスコープの「の(だ)」であるならば、名詞自体には後接しないはずである。以下、各形式が名詞自体に後接しうるかどうかを見てみる。

(66) ??彼は学生なのではなく(て)<sup>4)</sup>、フリーターなのだ。

(67) \*学生なのでは、無理だ。

(68) 学生んだから、しっかり勉強しなさい。

(69) 学生なのですが、雇ってもらえますか。

(66)～(69)のように「のではなく(て)」「のでは」は名詞に後接しにくい<sup>4)</sup>が、「のだから」「のだが」は全く自然である。したがって、「のだから」「のだが」の「のだ」は、名詞句化するというだけの目的で用いられたものではないこと、つまりスコープの「の(だ)」ではないことがわかる。そして、「のではなく(て)」「のでは」の「の(だ)」は名詞句化することを目的として用いられスコープの「の(だ)」と考えられる。

次に、各形式の節内に、とりたて詞「は」が入りうるかどうかを見てみたい。「の(だ)」が、前接する部分に「は」を含みうるということは、助動詞化したムードの「のだ」だということであり、「は」が入らないということは、「(いわゆる準体助詞の)の」+「だ」という組成に近いスコープの「の(だ)」だということになる。

まず、「のではなく(て)」はどうだろうか。

(70) 雪子は〔スキーが嫌いな〕のではなく(て)、〔寒さが嫌いな〕のだ。

(71) ??雪子は〔スキーは嫌いな〕のではなく(て)、〔寒さは嫌いな〕のだ。

(72) 雪子はスキーは〔嫌いな〕のではなく(て)、〔下手な〕のだ。

(70)(71)(72)のうち、「のではなく(て)」の節内に「は」を入れようとし

た(71)だけが不自然である。

「のでは」も同様に「は」が入りにくい。

(73) [君が来ない] んじゃ、みんながっかりするよ。

(74)?? [君は来ない] んじゃ、みんながっかりするよ。

他方、「のだから」「のだが」は、次のように、「は」を入れても全く自然である。

(75) [私は今日は頭が痛い] んだから、静かにして下さい。

(76) [私は今日は用事がある] んですが、明日でもよろしいでしょうか。

したがって、「のではなく(て)」「のでは」の「の(だ)」はスコープの「の(だ)」であり、「のだから」「のだが」の「の(だ)」はムードの「のだ」であることが確認できる。「から」「が」というのは、本来、節内にムードの形式を含みうる形式なので、ムードの「のだ」が前接できるのも自然なことと言える。一方、「ては」は、本来、節内にムードの形式を含むことのできない形式であり、前接する「の(だ)」がムードの形式ではないということも自然なことである。

最後に、本稿で扱った「の(だ)」の機能を次のように整理する。

		「名詞+接続助詞」との共通性	名詞に後接できるか	「は」が入るか
スコープ の 「の(だ)」	のでは	共通性が多い	*[名詞]なのは	不可
	のではなく(て)	共通性が多い	??[名詞]のではなく(て)	不可
ムードの 「のだ」	のだが	共通性が少ない	[名詞]なのだが	可
	のだから	共通性が少ない	[名詞]なのだから	可

本稿は複文における「の(だ)」の全体像を捉えることに重きをおいたため、個々の形式の考察については、その機能、性質の一部しか扱うことができなかった。また、文末の「のだ」のムードと、「のだから」「のだが」における「のだ」の機能の関係についても論じることができなかった。しかし、「のでは」「のではなく(て)」と、「のだから」「のだが」とに、上の



表にまとめたような文法的な性質の違いがあることは指摘できたと思う。

なお、上の表においては、スコープの「の(だ)」とムードの「のだ」との相違点を明確にするために両者を二分したが、実際には、両者には、共通点があり連続性がある。例えば、「のでは」の文において、Pが事實的、確定的であることと、「のだから」において、Pが相手が既に知っている事柄として扱われる、ということ等は、統一的に捉えなければならない問題である。これは、「の(だ)」の本質に関わることであり、三上(1953)の「既成命題」という概念が鍵となる。だが、すべての「の(だ)」に共通する性質を論じるだけでなく、スコープの「の(だ)」とムードの「のだ」の違いにも目を向ける必要があると考える。

今後、今回の考察もふまえて、スコープの「の(だ)」とムードの「のだ」の連続性を探り、「の(だ)」の全体像を捉えていきたいと考えている。

〔付記〕 本稿は第4回日本語文法談話会(1990年12月9日、国立国語研究所)で口頭発表した内容に加筆、修正したものである。貴重な助言をくださった方々に感謝いたします。

## 注

- 1) 逆条件を表す「ても」は、「の(だ)」には後接しない。
  - (i) 雨が降っても、私は絶対に行く。
  - (ii) \*雨が降るんでも、私は絶対に行く。
  - (iii) いくら忠告しても、聞き入れてくれなかった。
  - (iv) \*いくら忠告したんでも、聞き入れてくれなかった。

「のでも」という形は不可能ではないが、「も」が任意の場合に限られており、「の(だ)」+「ても」という構成ではなく、「の」+「て」+「も」という形だと考えられる。

  - (v) 一人で留守番して(も)、かまわないよ。
  - (vi) 一人で留守番するので(も)、かまわないよ。
- 2) 文末の「の(だ)」の機能については、詳しくは小金丸(1990a)を参照のこと。
- 3) 「のではなく(て)」の機能、「ないで」「なくて」との違いについては、詳しくは小金丸(1991)を参照のこと。
- 4) 名詞に「のではなく(て)」が後接したもので、次のような例は自然である。
  - (vi) 彼が学生なのではなく(て)、彼女が学生なのだ。

これは、④のように「彼が学生だ」という部分全体を「の(だ)」で名詞句化したものであり、名詞のみに「のではなく(て)」が後接したものではない。

④ 「彼が学生だ」のではなく(て), 「彼女が学生だ」のだ。

↓  
な

↓  
な

## 参考文献

- 奥津敬一郎, 沼田善子, 杉本武 (1986) 『いわゆる日本語助詞の研究』 凡人社  
 北川千里 (1976) 「「なくて」と「ないで」」 『日本語教育』 29  
 久野 暲 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店  
 久野 暲 (1983) 『新日本文法研究』 大修館書店  
 小金丸 (現 野田) 春美 (1990 a) 「ムードの「のだ」とスコープの「のだ」」 『日本語学』 9-3  
 小金丸 (現 野田) 春美 (1990 b) 「作文における「のだ」の誤用例分析」 『日本語教育』 71  
 小金丸 (現 野田) 春美 (1991) 「「のではなく」の機能」 『阪大日本語研究』 3 大阪大学文学部日本学科 (言語系)  
 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究 助詞史素描』 桜楓社  
 駒田 聡 (1987) 「「ノダカラ」における推論のプロセス」 『ANP 紀要』 1 同志社大学  
 駒田 聡 (1991) 「ノダ表現の指導」 吉田弥寿夫先生還暦記念論集編集委員会 (編) 『日本語教育論集—日本語教育の現場から—』 学習研究社  
 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』 和泉書院  
 ティノコ, アントニオ・ルイズ (1988) 「「デハナク」の論理について」 『言語学論叢』 6・7 筑波大学一般・応用言語学研究室  
 戸村佳代 (1986) 「「なくて」, 「ないで」再考」 『筑波大学留学生教育センター日本語論集』 1  
 仁田義雄 (1982) 「助詞類各説」 『日本語教育事典』 大修館書店  
 仁田義雄 (1987) 「条件づけとその周辺」 『日本語学』 6-9  
 蓮沼昭子 (1987) 「条件文における日常的推論—「テハ」と「バ」の選択要因をめぐって—」 『国語学』 150  
 花井 裕 (1990) 「「ので」の情報領域—「から」の対話性と比較して—」 『阪大日本語研究』 2 大阪大学文学部日本学科 (言語系)  
 松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』 中文館書店 (復刊1977 勉誠社)  
 三上 章 (1953) 『現代語法序説』 刀江書院 (復刊1972 くろしお出版)

## 用例の出典

柴門ふみ (原作) 坂本裕二 (脚本) 『「TV版シナリオ集」東京ラブストーリー』

小学館 1991

曾野綾子『神の汚れた手(下)』文春文庫 1986

俵 万智『魔法の杖』河出書房新社 1989

松本侑子『巨食症の明けない夜明け』集英社 1988

三田誠広『いちご同盟』集英社文庫 1991

村上 龍『すべての男は消耗品である』角川文庫 1990

吉本ばなな『N・P』角川書店 1990

渡辺淳一『脳は語らず』新潮文庫 1991

(文学部日本学科助手)